

MAKOTO

YOUNG BUDDHIST ASSOCIATION MAGAZINE

no.149



かわる

かわる、カワル、変わる、代わる、換わる …。

いろんな「かわる」がある。

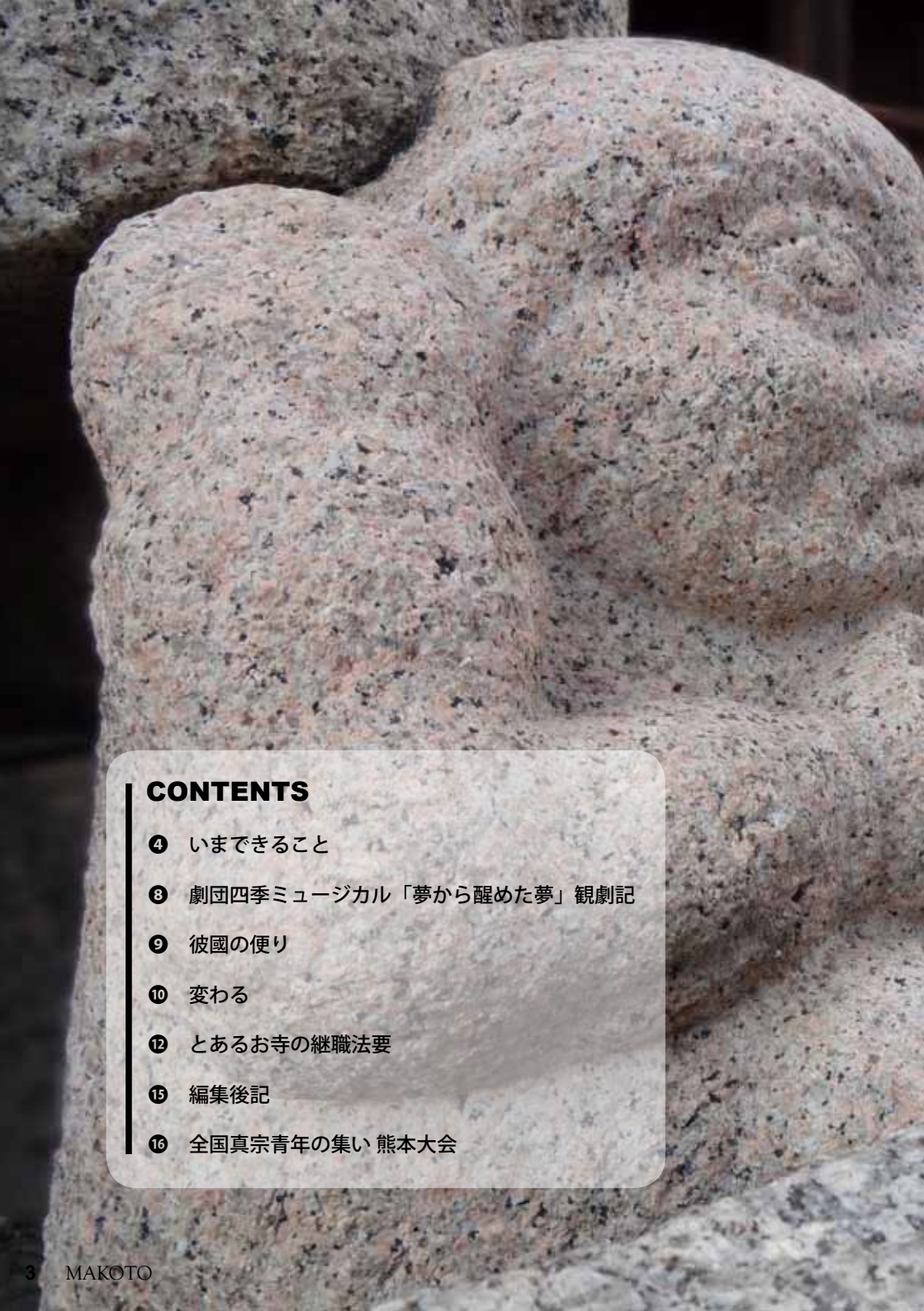
毎日、同じ生活をしているけれど、かわっている。

不思議なことだ …。

昨日の自分と今日の自分は同じだけど、かわっている。

いつも換わっている。移り変わっていく。

「諸行無常」 かわらぬものは一つもない。



CONTENTS

- ④ いまできること
- ⑧ 劇団四季ミュージカル「夢から醒めた夢」観劇記
- ⑨ 彼國の便り
- ⑩ 変わる
- ⑫ とあるお寺の継職法要
- ⑮ 編集後記
- ⑯ 全国真宗青年の集い 熊本大会

い ま で き る こ と

文・上高原直樹

2012年11月16日から18日、22日から23日の5日間かけて、宮城県仙台市にある仙台別院『東北教区災害ボランティアセンター』を拠点に災害復興ボランティアに行ってきました。

5日間で主に私のさせてもらったボランティア活動は、震災復興ボランティア団体『おもいでかえる』での活動でした。『おもいでかえる』とは、震災時の津波などで流されてしまった、写真、賞状等をがれきの中から拾ってきて、汚れたアルバムから切り取り、エタノール等で洗浄し、乾燥させて最終的に展示会などを行い、持ち主の方の手に写真が戻ることを目標に活動している団体です。

今回僕は、写真の切り取りの作業を2日間させていただきました。写真はどれも泥や海水などとても汚れていました。写真の状態もかなり悪いものもあり、なかなか作業が難航しそうなものばかりでした。一枚一枚アルバムから切り





取り、どの地区から来たものかナンバリ
ングするという作業ですが、この写真が
持ち主の方に戻ればと思いながらの作業
でした。10時から16時までの作業でだ
いたい100枚くらい作業を終えることがで
きました。

このボランティアに参加している人自
体も全国各地からきていて、毎日入れ替
り立ち替わりで新規のボランティアの方
が来ています。写真の展示も2012年
の2月29日から3月25日に第1回目を
行い、2回目も近々予定しているとい
うことでした。

今回僕はここが主なボランティア活動
でしたが、2年前の3月11日からいま
だに様々な場所でボランティア活動が行
われています。飛行機からみた仙台の海
岸線はまだ護岸工事をしていたり、生々
しいものがありました。しかし、いざ仙
台市内に着くと本当にここが被災地な
のかと思うようなさびやかな光景でした。

震災復興ボランティア団体

おもいでかえる 

大切な思い出がかえりますように



「東北教区災害ボランティアセンター」では、平成23年3月17日の設置以来、全国から集まったボランティアは3,300名を超え、のべ14,000人の方々が奉仕活動が続けています。また、このセンターはボランティアの方のための宿泊施設としてもお使いいただけます。宗派内は元より、他宗派・他宗教の方、一般の方々にも多数ご利用いただいております。すべては、復興という思いを持たれている方のための施設です。お気軽にお問い合わせください。

「東北教区災害ボランティアセンター」

〒980-0824 宮城県仙台市青葉区支倉町1番27号

電話：022-227-2193 touhokukyouku@asokakids.co

いくら建物はきれいになったからといって被災者の心の傷はいまなお癒えることはないと思います。

現地の人はみなさん来てくれるだけでとてもうれしそうにしてくれます。なによりも現地に一度足を運んでみてください。そして、東日本大震災を忘れないでください。

2011年冬に観劇した劇団四季ミュージカル「夢から醒めた夢」について紹介します。この作品は、赤川次郎原作で今日までに140万人以上動員しているそうです。この舞台の観劇は、約20年ぶり2回目。20年前といえば、当時私は小学生でしたが、初めて観た劇団四季ミュージカルがこの作品でした。

まずは、ストーリーを簡単に：

好奇心旺盛で死後の世界に憧れる少女ピコは、夢の配達人が運んできた夢の世界に足を踏み入れ、夜の遊園地で幽霊の少女マコと出会う。交通事故で突然命を奪われてしまったマコの「嘆き悲しむ母親を励ますために、1日だけ入れ替わって欲しい」という願いを受け入れたピコは、マコの光の国行きの白いパスポートを手に霊界空港に行き、そこで働くさまざまな幽霊(?)たちと出会う。そして、再びピコとマコが入れ替わる時がやってくる……。冒頭の夜の遊園地のシーンでは、白黒ピエロのエネルギーなアクロバットシーンに目は釘付け！やがて幽霊のマコと出逢い、入れ替わって霊界



劇団四季ミュージカル「夢から醒めた夢」観劇記 文・田中慎也

空港にやってきたピコは、そこで出会ったさまざまな最期をとげた幽霊たちとのやりとりの中で、日頃忘れかけている大切なことに気づきます。

それは、「戦争や飢餓で不本意な死をとげた子供がたくさんいるのに、自ら命を絶つとはなんて愚かなことか」「みんなデメエのことばかり考えやがって、なんて身勝手なんだろう」として「困っている人に手を差しのべることの大切さ」「自己中心的な人ばかりではなく誰かに対して思いやりや優しさを持っている人もたくさんいること」でした。

最後の場面で1日だけこの世へ戻ってきたマコが、あの世へ戻らなくてはならない時間がやってきます。そのときお母さんが愛する我が娘を離さずがりつくシーンがあります。このラストの生と死の入れ替わりの儀式が、一番観客の涙を誘うシーンだと思えます。生と死の境界、あの世とこの世の壁……でも、そこに存在するのはピコが「生きている」ということと、マコが「生きていた」

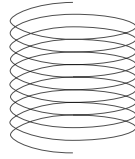
ということ。

この世に戻ったピコは最後のシーンで唄います。あの世へ旅立ってしまったマコ、霊界空港で出会ったかけがいのない人々。みんな近くにいるても、目には見えない。「みんな光になったのね」と。このミュージカルの根本にあるもの、それは「生きているだけで素晴らしい」「与えられた命を大切にしくちやいけな」ということだと思えます。

僕は本当にミュージカルを観るのが好きです。その理由は、劇場という非日常の空間で、体は客席にいても心は俳優たちと一緒に舞台にいろことができるから。そして、舞台上で繰り広げられる一糸乱れぬダンスや、興奮するハイクオリティなパフォーマンスは、団員さんの厳しい稽古や努力の賜物なんだな。そう思うだけで、自然と涙が出てきます。非日常世界の感動をめいっぱい楽しみながら、今の日常の世界がますます充実したものになるよう、自身を高める努力を続けていこうと思います。

彼國の便り

善無~~×~~惡有



私たちは、様々な価値観をもって生きています。この価値観の違いから争いが起こることも多いのではないのでしょうか。そんな時に、つい「自分が正しい、相手が間違っている」と考えてはいませんか？ こんな童話があります。

一人の画家がいました。この画家は、まだ若い頃に「だれが見ても心が和む、暖かい絵を描いて欲しい」と依頼をうけたそうです。この依頼に、画家は悩みます。「どんな絵を描けばだれしもの心が和むのであろうか。穏やかな海を描こうか、しかし、海で辛い思いをした人もいるだろう。雄大な山を描こうか、しかし、山で辛い思いをした人の心は和むまい。」途方にくれた画家が公園で休んでいると、数人の子供たちが遊んでいる姿が目につりました。「そうだ、子供の笑顔を描こう」画家は、子供のなかでも特に笑顔のすばらしい子供の絵を描きました。依頼主はたいそう喜んだそうです。数十年後、この画家に今度は「誰が見ても背筋の凍りつくような、恐ろしい絵を描いて欲しい」との依頼がありました。またしても悩んだ末に、「何人も人を傷つけた恐ろしい人は、恐ろしい顔に違いない。」と考えて、監獄にいきましました。なかでも一番恐ろしい囚人の顔を描いたそうです。絵を描いていると囚人が話し掛けてきました。その話から、この囚人は数十年前も前にとびきりの笑顔を見せてくれた子供だと分りました。

私たちは、数え切れないほど多くの人と関わって生きています。自分の価値観も、その中でできあがりました。ですから、自分が正しい、と考える前に少し謙虚になってみませんか？

文・高田篤敬（仏青連盟指導講師）



変わる

文・巖根眞弥

「まさや、餃子食べたいからどっか連れてって」

これは、ちよつと家から遠い、僕の大好きなラーメン店まで、おばあちゃんと久しぶりに一緒に行つた時の話です。車で30分ほどのお店に僕の運転で行きました。

車の中でおばあちゃんが言います。「あんな小さかつた子が自分の車でおばあちゃんを連れてつてくれるなんて想像もしてなかつたわ」って……。おばあちゃんは僕が成長する度に同じことを言います。中学校に上がったときも「まさやの制服姿見られるなんておばあちゃん嬉しいわ」とか、初めてのお参りで布袍(ふろう)をきた時も、大学に進学した時も……。いつものことなので「相変わらず大げさだなあ」と思いながら運転をしていました。

30分後お店に着いて、僕は特製ラーメン大盛りとライス、おばあ

ちゃんは餃子とご飯とどて煮を頼みました。ラーメンが出来上がると、僕もおばあちゃんもなかなかの勢いで食べ始めました。僕はラーメンがすごく好きなので、食べている時はいつも笑顔になっているそうです。おばあちゃんはそんな僕を見て嬉しそうにします。あまりにもおばあちゃんがニコニコしながら食べているので僕もつられて笑ってしまい、なんかおかしいな二人になっていました。

ラーメンを食べ終わったので、おばあちゃんを見ると、お皿には餃子もどて煮もご飯も、見事に残っています。おばあちゃんは僕の方を申し訳なさそうに見て、「ごめんね、おばあちゃんもつ年だから。食べられないや。」と言います。たしかに量の多いラーメン店だったので、「なら僕まだ食べられるからもうわ」と、おばあちゃんの残したものをすべてきれいに食べました。食べながら、ふと昔のことが思い出しました。

幼い頃、ラーメンが大好きでつい無理をして大盛り注文し、結局食べきれなくておばあちゃんに食べてもらってたなあ。しかも、帰りおなかが痛くなって歩けなくておぶってもらったことも…。それがいつの間にか立場が逆転。

よく地元の橋の下にある屋台のラーメン屋に連れてってもらっていたのが、今では僕がおばあちゃんを連れて行くようになったし。あんなに若くて、毎日のように僕をおんぶしてくれていたおばあちゃんの顔も、今ではシワも増えて、背丈も頭二つ分違います。おばあちゃんが小さくなったようで少しさびしくもあります。でも、これからは恩返しができる気がして嬉しくもあります。

おばあちゃん、今度は僕がおんぶしてあげるから、安心して。元気なでいてね。





とあるお寺の 継職法要

ケイシヨクホウヨウ

文・野口哲城

お寺には「住職」という方がおられます。お寺の法要やご門徒の御法事をお勤めしたり、お寺に関わる様々な事を責任もって行われる方です。また、その役目が代わる事を「住職継職」といいます。

11月、長崎県にあります西明寺というお寺で「住職継職」の法要がお勤まりになりました。こちらのお寺で受け継がれてきたその職もこのたびで十九世となります。

十八世住職は、35年間ご住職を務められました。新しくご住職になります町田秀映さんが誕生した年でした。そして、その新任住職様も今年でちょうど35歳となります。

法要は午前中お勤まりになりました。まず、お寺の庫裏（住まい）からの行列が本堂に入ります。行列は大きな太鼓と雅楽の音色が鳴り響く中仏旗を先頭に、お寺の役員さん、婦人会のみなさんをはじめ、雅楽を奏でるお坊さん達に続き、色彩豊かな袈裟を纏った僧侶。そして、かわいい御稚児さんたち、

最後に法要をお勤められます新田両住職さま。法要のお勤めは、この日のためにご門徒さんや保育園の皆様がお稽古してきた宗祖讃仰作法音楽法要のお勤めです。オルガン、雅楽の厳かな音色、そしてみなさんの元気な声で賑々しく法要がお勤まりになりました。引き続きお衣の授与、新旧住職さまのご挨拶等の式典、ご法話をもって一座の終了となります。

翌日、翌々日の法要をお勤めするのは新しい御住職です。お昼からの余興では、ご門徒とご住職達が地区に受け継がれてきた太鼓、笛、踊りの披露。外のテントでは、新任住職さんの同級生やご門徒の集い、西結会の青年の皆さん総出で、御参詣の皆さんや、子供たちにとりどりの綿菓子、ポップコーン、おもちゃ等を振る舞ってくださいました。様々なもの、ことが受け継がれていきます。

町田さん親子は、お寺で法務をする傍ら、田畑でお米や野菜を





作っておられます。こちらのお寺では土に根差した生活も代々受け継がれてきました。季節野菜、お米、蕎麦。親鸞聖人の御命日の一月の御正忌にはこちらの畑で育てられた蕎麦の実から手打ちのお蕎麦がふるまわれます。御法事に行った折、近所のご門徒さんが、稲の立ち具合やたんぼの水の事を心配して教えてくれるそうです。住職さんも、気になって法事の帰りにでもすぐ稲をたてに田んぼによられます。なにより自分が食べるもの、そして作物を育てる楽しみ、農作業は孤独なものではなく、土を通して、人と人のつながりや助けをあらためて、教えてくれることがある。そう話して下さいました。

食卓にあるお米、お店にあるおにぎりやお弁当、何も考えることなく、頂いている食事の中、ひとつ一つの作物に水や土を離れて実ったものではありません。どんな仕事や暮らしをしていても、何年

も土を触ることがなくても、わたしたちは水や土を離れて暮らす事はできません。

土に根を下ろし

風と共に生きよう

種と共に冬を越え

鳥と共に春を歌おう

ある谷に伝わる歌を思い出し、ます。この度の記事の取材で久しぶりに、「土」に触った気がしました。



編集後記

上 高原 直 樹

第2回目の発行になりました。今回のテーマは「かわる」でした。季節的にも、新しく職場がかわる、あるいは、進学などで学校がかわるなど様々な「かわる」機会があると思います。私事ですが、4月から私も進学ということで学校がかわります。新しいことへの期待と不安を楽しみにがんばりたいと思います。

野 口 哲 城

年度がおわります。今年は減量に成功して服のサイズが変わりました。「やればできる」を実感した一年です。来年は身長を伸ばしたいです。

巖 根 眞 弥

「変わる」改めて考えてみると実際いろいろなものが変わっています。心情だったり、季節だったり、預金残高だったり、考えればきりがなくなって思うのに、いざ書くとなるとなにも思い浮かばない。今回めっちゃめっちゃ記事を書きだすまで時間かかりました。この春で学生終了なので、大きな「変わる」です！不安90%希望10%ですが、頑張っていこうと思います！

海 野 康 成

今回の makoto149 号のテーマは、『かわる』でした。編集後記を書いていて思い出しましたが、第1回広報委員会の会議で冗談半分に、次の『まこと』のテーマを「かわる」にしたら、どうですか？と言いました。それが運命の始まりでした。今思うと、私のアイデアで良かったのかと思います。やはり、次の makoto は150号だから、あの「テーマ」になるのだろうか。えうご期待。

田 中 慎 也

今回、広報委員になって初めて「まこと」の原稿を書かせていただきました。文章を書くという作業は、すごく労力がいることだと改めて実感しました。今後も「まこと」の製作を通じて、自分を高めることができればと思います。



本当に「大切にする」ということ

会場

くまもと森都心プラザ

日時

十月十二日（金）・十三日（土）

大会パネリスト

上野千鶴子（東京大学名誉教授）

雨宮処凛（作家・反貧困ネットワーク副代表）

田尻由貴子（慈恵病院看護部長）

栗山俊之（筑紫女学園大学短期大学部教授）

2013 全国真宗青年の集い 熊本大会

担当：熊本教区仏教青年連盟